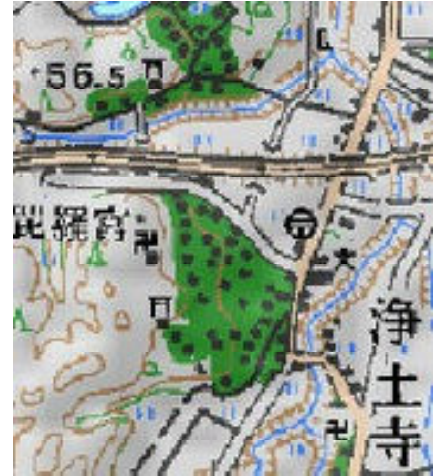


青井谷の地層

新生代第4紀のごく新しい地層 青井谷

北陸自動車道を富山市から高岡方向に向かうと、小杉インターを過ぎる辺りから「射水丘陵」が広がります。

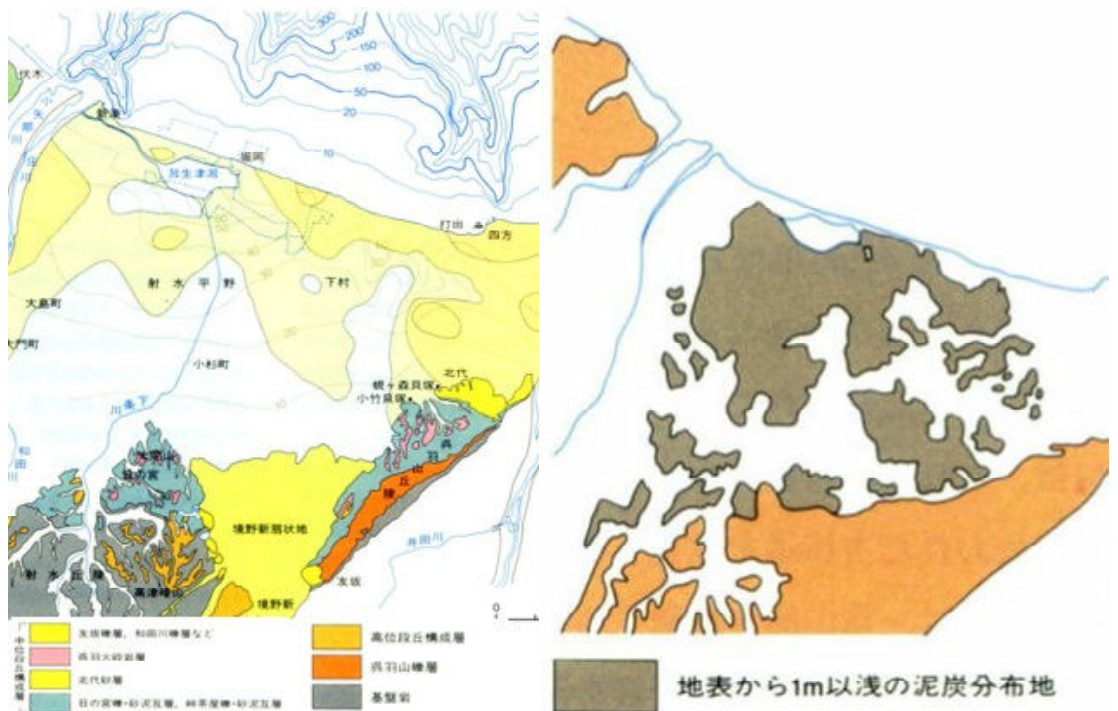
射水市で一番古い地層は県道472号線付近に広がる上部音川層に相当する青井谷泥岩層です。この地層が堆積した時代は、富山湾に寒流が流れ込んでいたため、気候も冷涼であったことが植物の花粉や貝化石などから推定できます。堆積物にあまり変化がなく層理面(層と層との境界面)もはっきりしないことから、かなり深い海で比較的安定した環境でゆっくり堆積を続けていたことが分かります。



その後、新生代第4紀になると、氷河期と間氷期が繰り返され海面も上昇と下降が何度も繰り返されました。青井谷から生源寺にかけての泥岩層内からは、ヒシの実の化石が発見されています。ヒシは湖沼などの淡水に産出する植物で、この化石が産出することから、以前はこの辺りも沼のような場所であったことが分かります。

射水平野には、地表から1m程度の所に泥炭層が分布しています。これは、縄文海進を過ぎた縄文後期～弥生時代にかけて汀線が海側に張り出して沿岸砂丘ができ、内陸側の後背湿地では河川の蛇行によってできた湿地に有機物(植物の葉や枝など)が堆積してできたものです。同時に、砂丘の内側の窪みにも泥炭がたまり、スギやブナなどの木を枯死させてしまいました。このようにして枯死した木が「新湊」「越の淵」「四方」「神通川河口」などの埋没林となったのです。

射水平野には、新生代新第3紀の化石が少ないというのは、上で述べたように射水平野の成り立ちと深い関わりをもっているのです。



射水平野の地質

アーバンクボタ 31号 p43より転載

射水平野の泥炭分布

アーバンクボタ 31号 p43より転載